

現在

参加

平成七年から全抑協大田市支部長と県連合会副会長の要職に任命され、会員の指導と会の運営に最大の協力をいただき、活躍をされておられます。

(島根県 本田 吉則)

シベリア抑留記

岡山県 片山 衛 真

最後の戦闘

昭和二十(一九四五)年八月十三日、斬込隊に一番に志願したが、西森班長は貴様は殺さぬと小声で話した。どうせ戦死していく身、生きていれば日本のこと、故郷のことを思う。時には苦しむこともある。戦死してしまえば楽になると考えた。軍国主義教育において忠孝一本、親孝行は国に命をささげることであり、国のために戦っていくことが日本男子の本懐であ

る。私たちは、戦死していくことが至上命令であり、天皇守護に散ることを信じ戦った。興安嶺の山頂において幾日も戦車の進入を防ぎ、歩兵部隊の進入も許さなかった。日本軍対戦車、連隊砲、速射砲、九十野砲は敵戦車により使用できず、毎日六十人の肉攻隊員により進入を防いでいた。肉攻隊、肉で攻めるダイナマイト十キロ入った木箱であり、人間と共に敵戦車に飛び込んで行くのだ。夕刻我々の陣地より出発して行った。全員二十歳の若者たちであり、日の丸の鉢巻きをし銃も手榴弾も持っていない。ダイナマイトの木箱のみだ。一杯の酒を交わし出発して行く。話す者はいない。彼らは数時間後には戦死するのだ。顔色も無く、姿も人間とは思われない人形のような。生きて帰れば銃殺刑が待っている。必ず死んで行く彼らである。私も今日の日が分らず彼らを送るのに悲しみを感じることはなかった。山頂においては銃撃戦である。谷間を通る軍用道路は敵戦車が進撃して来るが、双方共進入を防いでいた。

十四日、戦友が、肉攻隊員に指名された。彼は近視

であったため、初年兵教育当時ベッドを共にしていた。今日まで互いに助け合い励まし合って来た友であり、彼の死は私より悲しかった。彼の死出だ。私は顔を剃ってやった。彼は笑いながらカミソリの音を聞いていた。出発と同時に死が待っている彼だ。私は彼の父母の事を思うと父母の悲しみはいかほどか、今私たちの戦いは勝ち目のない戦いだ。味方の飛行機も戦車も一台も出てこない。戦いは敵の飛行機、戦車が相手である。今若い兵士が散って親が喜ぶだろうか、生きるだけ生きるんだ。私は死ぬことに文句はないが戦友の死は心を痛める。帝国軍人として言うべきことでないことを彼に話した。夕刻、陣地を出発し、夜間目的に到着、明朝肉攻隊の攻撃である。夜間南の山に逃げろ、生きるだけ生きるんだと彼に話した。彼は何も返事はせず笑っていた。淋しさを忘れようと笑っていた。夕刻彼の出発を見送った。見送る者は私一人だった。何も言わずに別れた。彼の目には涙が流れていた。私も泣いていた。夕暮れ別れだった。四年後彼より岡山に便りがあった。君の話した通り南の山に逃げ

込み、草を食べて一カ月後、草もなく雪を食っていた頃、ソ連軍に捕虜になったとのこと。以後文通はなく、元気であれば再会、当時を話し合ってみたい。

彼と別れた頃、我々の陣地にあった本部は後方に逃げたのだから、幹部はいなくなってしまった。敵歩兵部隊が進撃して来るので、中隊は陣地西方の丘において戦闘を開始する。中隊には九丁の軽機関銃と小銃だけである。乱射撃であった。深夜になると銃撃音も静まり風もない静かな夜であった。月の光で白樺が美しい。食料も弾薬もなくなった。銃剣を持って突撃を待っている。八月十五日、今日は私たち全員玉砕の日であろう、どうすることもできない。伍長は私に南の山中に逃げ時を待つことを話したが、私は中隊戦友と別れることはできず玉砕の時を待つ。未明突然五一五部隊の一個中隊が交代に来てくれた。我々九中隊は丘を下り陣地で弾薬、食料の補給を受ける。正午頃交代した五一五部隊は全員戦死の報あり、戦闘配備に付く中隊長〇〇中尉は正面での戦闘を中止して南の山中に入る。我々の開領陣地には日本軍は撤退して姿は見ら

れなかった。戦闘が増し同年兵の一人が精神に異常を起し、敵軍の捕虜になるよりはと手榴弾を抱かせて即死させた。昭和二十年八月十五日午後二時頃だった、終戦の日でもあった。自動小銃、重機関銃音は近くに聞こえてくるが、敵の姿は見られず中隊は山を越えて鉄嶺チツインに向かって行軍を始めていた。細い山道を一列になって進んでいる。進むよりは後退しているのだ。真夜中ツンドラ地帯に出合い、中隊全員腰まで水につかり行軍する。対岸において枯れ木を集めて衣類を乾かす。

八月十六日の朝も冷え込んでいた。日中は温度も上がっていたが、秋の近づいた気候であった。風もなく静かな原始林であった。ノロ(鹿の一種)がいたので小銃で撃ったが逃げられてしまった。兵士たちは話すことも何も考えることもなかった。ただ敵の発見攻撃、戦闘が開始されれば今度こそ命はない、中隊武器弾薬は数時間でなくなる。幾日歩いても本隊と合流はできないだろう。ただ死を求めて歩き続けている。

八月十六日十二時頃、二千メートルほど前方にマツ

チ箱くらいに見える敵戦車群が南に向かって土煙をあげて走っている。中隊長は、戦車攻撃を命令、戦闘配備に。軽機関銃と小銃では、前進を続ける一台の戦車も止めることはできないだろう。隊長は中隊最後の戦闘、全員玉砕を思ったのだろう。前進が続けられる。

十六日午後二時頃、敵戦車に接近するにつれ、異様な姿が見られた。日本兵が列をなして南下している、武器は持たず帽子のない者もいる。国道より千メートルほど手前、私たちは草原の中で小休止、隊長一人国道に向かって歩を進めていた。

最後に出会った中国人

昭和二十年八月十六日午後二時頃、昨日より水も飲んでいなかった兵隊たちは草原に横になり、秋空の青い空を見詰めている。銃声は時折ボン、ボンと轟いてくる。昨日、戦友、長友は、天皇万歳を叫んで死んでいた。彼は親兄弟のない淋しい人であったが気のよい兵隊だった。草原の中で故郷のことを思う。日本本土も戦渦はいかほどか、敗戦は間違いない。空腹も手伝い気力が無くなる感じた。二〇〇メートルほど先に

中国人の民家が一軒草原の中にあつた。屋根には赤旗が上がつていた。我々は終戦の知らせはないが、今はソ連軍の支配地区になつたことは確実のようだ。昨日まで味方であつた中国の人々も今は敵になっている。

その民家より一人の老人がバケツを両手に、私たちの方に向かつて歩いて来る。黒い支那服を着て、小柄で六十歳くらいだろうか。日本人を彼らは良く思っていない。私自身、中国人に対し悪いことを数知れず行つてきた。その日本人に水を運んで来た。彼は遠くから、私たちが水を求めていることを知つたのだから、他人のため、自分は殺されるかも分からぬ時に敵兵士に水を運ぶ。私たちが兵隊は、シエシエ、ありがとう、御礼を言う。清い水であつた、美しい水であつた、おいしい。彼の心に涙する者もいる。彼は喜んで我々のところを去つて行く。後ろ姿に大声でありがとうと叫んだ。ポトポト歩いて帰る老人に手を合わせる気持ちになつた。私の人生は彼を師として歩んで来た。一度会つた名も知らぬ老人であるが、私の心には一生残る最後の中国人であつた。

武装解除

昭和二十年八月十六日午後三時頃、水を運んでくれた老人が帰つた頃、東の方向より中隊長が帰つて来た。集合の号令で整理して中隊長を迎える。隊長は次のように話した。「八月十五日正午、日本は無条件降伏、戦争は終わった。この地において武装解除する」。今日まで死に場所を求めて戦い、帝国軍人の武装解除は最も汚名を残すもの、草原の中で兵士、隊長共に涙を流していた。歩兵銃には菊の御紋が刻まれている、天皇より預かりしこの兵器は自分の命と思うほど大切にした小銃を今この地にて決別である。剣も弾薬も鉄帽も。二〇キロほど軽くなる。遠くでまだ銃声が聞こえてくる、終戦を知らぬ隊が交戦しているのだろう。私たちは戦争の目的を失い、失神したように無意識に南に向かつて歩きだした。南下していたソ連戦車群も今は走っていない。日本兵が各陣地より鉄嶺に向かつて集まっている。日本の軍用トラックが数台、故障したのだろう、止まっていた。食料らしきものがあつたが、誰も取りに行かない、話し声もなく歩を進めてい

た。

鉄嶺

十六日午後五時頃、鉄嶺に到着することができた。

鉄嶺は、興安嶺、ソ連国境の各陣地に通ずる重要地点であり、弾薬・物資の集配地点でもあった。日本人の軍人・軍属の官舎が十数軒あった。十円札、百円札が風に吹かれて紙屑のように飛んでいる。集める者もない、使用することもできない紙になってしまった。釜には飯が入っていた。にぎりを作ったままだった。空腹の私たちがいただいた。民家の人々は何も持たずに逃げたのだろう。家の中は荒れていた。酒樽も幾本か割れていたが、私は飲む気にならず水を探し求めたが、得ることはできなかった。最終列車が出るとの知らせで駅の方に歩く。今まで聞こえていた銃声も今は鳴りやんでいた。屋根のない貨車に乗り込んで行った。午後七時頃だったが、北満の夕暮れは十時頃だ、まだ明るい。列車は鉄嶺を出発して行った。南に向かかって走り出した。日本に向かかって走っている、日本が近くなる。敗戦、戦争は済んだ。日本に生きて帰れ

る。先刻までは死を決意していた我々であるが、貨車の走る音を聞きながら、今は必ず日本に帰るんだ、待っている人のためにも元気で故郷の土をと無情にも内地が恋しくなってくる。

青年将校

鉄嶺を出発して二時間くらい過ぎた頃、列車は全速力で南下している。北側の軍用道路を軍馬が走っている、肩には部隊の軍旗を、軍旗は部隊の命である。陸軍士官学校出の陸軍少尉だろう、懸命に逃げている。後方にはソ連戦車群が走っている。一〇〇メートルほどあるだろうか、見通しの良い所では戦車は火を噴いている。命中はしなかった。銃身が定まらぬのだろう、幾度も撃っているが、命中しなかった。私たちの列車は速く、後方になり、見る事はできないが、この道は数百キロは支線のない一本道である、分岐点はない。無事逃げる事ができただろうか心残りになる。今も思い出すことがある。

義勇軍

駅もなく、北満の広野を列車の車輪から火を噴きな

が走り続ける。真夜中突然列車は急停車する。十五、六歳の少年五人が列車を止めて乗車して来た。各自竹槍を持っている。口々に叫んでいる、兵隊さん戦場に連れて行って。彼らは義勇軍という美名に尋常高等小学校を卒業後北滿の地に來ていた。もう戦争は終わったのだ。竹槍はいらない。御国のために尽くす心は変わらない幼い彼らは大声をあげて泣いていた。疲れていたのだから、涙を流しながら眠ってしまった。私も泣いていた。列車の音を耳にしながら故郷のことが次々と思ひ出される。八月なのに夜は冷えてくる。兵隊たちの顔はみんな気力のない顔に変わっている。目的の失われた少年のようだ。昼間の疲れか、深い眠りに入ってしまう。義勇軍の若者たちも私たちと同じ行動をすることになる。

フラルキ

八月十七日、草原を走り続けた貨車も正午ごろフラルキ駅に到着。フラルキ駅は名のみで、ブラットホームは灯もなく、駅舎もない駅だった。私たち初年兵教育隊として入隊した兵舎だった。寒さに耐えるため、

平屋の兵舎半分は土の中であり、入ると階段で下るようになっていいる。電灯はなく、石油ランプが使用された。少量のコウリヤンのかゆが支給された。空腹であったので、おいしくいただいた。同日夕刻出發命令が出た。今は戦争に敗れた我々は、いかにして命令が出ているのか、目的地をも知ることはできない。フラルキは入隊した地であり、日本より一人この地に來た思い出のあるこの土地を休むこともなく出發して行くのだ。長い列になって暗い夜道を歩き続ける。いつの間にか私たちの両側には自動小銃を持ったソ連の兵士が見守っている。

軍用犬も見られる。ツンドラを渡河する折、軍靴が使用不能になり地下足袋を使用していたので足の痛みに苦しむ。隊列を離れることは死を意味する。互いに励まし合いながら行軍を続ける。小休止には堀の泥水を飲む。用便のため隊列を離れ銃殺された者がいた。

十八日正午頃、チチハルの市街に入ることができた。町の入口には日本人、民間人、婦人、老人が我々の來るのを待っていた。互いに肉親、知人を探してい

たが、再会できた者はいないようであった。昨日正午少量の食事をして何も食っていない兵隊たちの体力も失われている。

チチハル

チチハルの部隊兵舎に入ることができた。チチハルには各陣地より集まった約二万人の陸軍兵士で兵舎は満員になっている。三度の食事は支給されたが、わずかなおかげであった。戦友に会うと、内地に早く帰りたい、帰りたい。兵隊たちはただ帰りたいの一念である。帰ることを忘れていた軍隊ではあるが、今は軍人として最も汚名である捕虜である。戦時中なれば死刑である。その汚名も忘れた人間になっている。

二週間ほどチチハルにいたが、何もすることもなく大半は床に伏していた。シラミは無数に下着に付く、洗うことも風呂に入ることもできない。夜中には南京虫が出てくる。小豆ほどに丸くなるまで血を吸う。歩くことのできないほど血を吸う。

二十日、全員が広場に集合する。捕虜が点呼である。ソ連軍の最高責任者は女性の将官であった。捕虜

が今日完全にこの女性によって確認されるのだ。彼女の後から男性の佐官級、尉官の将校が続いていた。チチハルではチフスの伝染病が流行していたが、我々の中隊の者は元気であった。田中、中田、畠山、三村等同年兵たちも元気だった。人生の空白のような毎日であった。日増しに朝夕冷え込んでいく。思うことは帰国の夢である。日本に帰る、このことをのみ日本兵は思い、過ごした毎日だった。

九月三日、樹木が黄色づき始めた頃、出発命令が出た。目的地は不明のまま、午前九時頃約二千人の兵士が出発して行く。体力も失われているためか苦しい行軍であった。

西か南か

太陽の光で行軍の苦しさも倍加される。同年兵の三村は苦しもうだった。彼の持ち物を私が持つ、西森班長は後から押していた。矢野班長は手を引っ張る、大声で元気づける。私自身は苦しさに耐えることはできなかった。おいしそうな大根、草があるが取って食うことは許されない。両側にいるソ連兵が時折空に向かって撃

つ。ダワイ、ダワイ、早く早くとかやましい。東の空を見て故郷を思い出す。苦しくなると、古里を想う。また元氣を出すのだ。涙を流すこともある、二十歳の兵隊だった。道路は草原の中に直線である。舗装はしていない。八月十七日、夜歩いた道だ。フラルキに到着したのは日暮れ前であった。西の空に夕日が沈む頃だった。赤い列車が我々を待っていた。貨物車である。到着順に乗車していた。三村君も私と共に乗車した。列車の進む方向が問題である。南に走れば日本が近くなる、西に進めば内地が遠くなってしまふ。どの兵士も南に進むことを願ひ、互いに信じていた。

乾パン三袋が支給され下車までの食料とのことであったが、数時間後には全部食ってしまった。ゴトン、貨物列車は動きだした。西の方向である。我々の戦場の方向でもある。南を信じていた兵士たちは望みを失ひ、だれも話す者はいなかった。板床に横になっている。真っ暗な夜の出発でもあった。妙に汽笛も淋しく聞こえてくる。昼間の疲れが深い眠りにつく。私たちが南下した鉄道を北上していたのだ。

戦場跡

九月四日早朝、私たちが戦った開嶺を通過する。貨車の窓より見ることができた。美しかった白樺の樹葉、色とりどりの草花も今は黄色と化し草花はなかった。多くの兵士が伏して死んでいる。馬も死んでいる。当時のままである。柿色の軍服の姿を淋しく悲しい想いで焼きつけるように見詰めた。彼らは日本帝国のために、天皇のために散っていったのだ。私は幾度か死を逃れ、捕虜としてまだ生きている。生と死、人間としていずれが幸だったろうか。ただ彼らの冥福を祈り家族の幸を願うのみである。日本軍の兵器は見られなかった。ソ連軍が持ち帰ったのだらう。数分の出来事であったが、忘れることのできない戦場跡であった。

ハイラル

夕刻ハイラル市を通過した。ハイラルは私たちの原隊であり、多くの部隊が駐屯していた。ノモンハン事件ではこの部隊が出動したのだ。私たちは東の丘にあった部隊で三六二部隊三大隊九中隊に二十年五月

六月と過ごした土地でもあった。西の丘には要塞があり、終戦日まで闘った陣地がある。今は人影もなく淋しい町と化していた。誰かハイラル小唄を歌いだした。貨車の兵、皆歌いだした。どの顔も涙を流していた。国境を過ぎても歌い続けている。詞が終わればまた初めから歌っている。淋しい歌が一層淋しい歌になる。その淋しさを耐えるかのように、サラバ ハイラルよ、また来るまでは、しばし別れの……今は捕虜になつて異国に送られている。歌うことによつて今の世を去つた戦友を思い、故郷を古里を思う。自由のない私たちには歌うことによつて互いに励まし合い助け合つていくのだ。どんなことがあるとも必ず日本に帰るのだ、待つてゐる人のためにも。

バイカル湖

列車は走り続けている、大自然の中を走っている。樹木の名は分からぬが大樹が密生している中を一日じゅう走る。駅もない。草原を一日じゅう走ることもある。道路も一軒の家もない。四日目の朝である、バイカル湖畔に出る。食事も四日食することはない。お

かげで用便の必要はなかつた。小便は貨車の戸を少し開いて用を済ます。

バイカルは美しい景色である。岸壁と湖の間を列車は走っている。時には湖の上を走っているようだ。水は青く美しい。波のない静かな湖上を大型貨物船が走っている。小船も数隻見られた。湖の広さは日本本土と同じで、深さは世界一と中学の時教わつたことがある。地図では少し南を鉄道は走っているが、夕刻まで駅もなく走り続けた。湖水が終わる頃チタ駅がある。造船所、鉄工所、製材所があるが、活気のない淋しい町であつた。列車が到着と同時に給水を受け、また木切れを集めて乗車する。夜中には零下五度くらい冷え込んできた。貨車の中にあるストーブで暖を取る。機関車と同じ各貨車の煙筒より黒煙を出して走る様はシベリアでないと見ることはできないだろう。

流刑捕虜列車

乗車して八日目だ、何も食してないため栄養失調死する者が出始めた。彼らは鉄橋を渡るたびに川に捨てられた。水を飲むと腹の中で波を打っているよう、

列車の動きと共にドブン、ドブンと鳴っている。体力を保存するために横になっている。一日じゅう話す者もない。列車は変わらず原野を走り続けている。体力も気力も失われていく。思い出すのは古里のことである。何を思い出しても美しいものばかりである。夕暮れ時に特に思い出すのは、故郷のことを、肉親を、友を、山を、川を、学校のこと、町のこと、思い出は大切にするのだが、気力が失われているので空想的に現れては去っていく。日本軍は敵兵を虫のごとく殺した。私も彼らを人間とは思わぬ人間になっていた。軍国主義教育により人間性を失っていた。今我々は反対に捕虜になった。苦しみを味わうことは当然であろう。私はある地点において全員重機関銃の乱射にて銃殺されるのではとも思った。目的地も到着時刻も食糧支給も、何の通達もない。今夜は零下十度くらい冷え込んでいる。列車の走る音と共に日本は遠くなっている。

イルクーツク

九月十三日、イルクーツク駅に到着する。シベリア

鉄道の中間地点である。シベリアの冬は早くやって来る、冷え込んできた。木切れを元気な者が集めた。寒いためか水は飲まなくなった。右側のホームに病院列車が入って来た。ソ連軍兵士の手のない者、足のない者が寝台に伏したままピストルを我々に向けて乱射してきた。貨車にブスブスと命中している。彼らは日本軍に不具者にされ、傷つけられ、その一念がピストル乱射である。気晴らしになったのか静かになった。幸いに我々の仲間に傷ついた者はいなかった。夕暮れ時の寒い時だった。今日で食事は十日何も口にしていな。人間も生きるものである。貨車のすき間から冷たい風が吹き込んでくる。兵隊たちは体を丸くして動かない。今は話す兵もない。ただ列車の音を聞きながら、故郷を思っている。十八歳までの古里の生活が次から次へと、思い出は美しい出来事ばかりである。美しい山、川、海、父を母を肉親を思う。一人で涙を流している。何のために泣いているのだろうか、日本男子が勇み立って、出征兵士として送られた私が、今は死と戦っているようだ。気力も体力も失われ、時折貨

車の天井を見ているだけだ。外の様子を見る気にも今はなれない。モスクワの方面に列車は走り続けている。汽笛の音も悲しく淋しい。

九月十四日、列車は無名の駅に到着した。プラットホームだけの停車である。町らしきものはなく、人影がちらほら見られる。突然ロシア人二人が乱入して来る。入口に立った一人の兵はピストルを持っている。一人の兵は片手に三十センチほどの小刀を持って日本兵の持っている万年筆、時計を探している。兵士たちは病人のごとく横になったきり。彼らは必死になつてさがし集めていた。私は戦闘中時計も万年筆も失いつつ持っていなかった。一人の兵が反抗したために腹部を傷つけられた。捕虜は何もできない、勝者の意のままである。日本軍が敵の捕虜、民間人に対して行った行動は非人間的な行為だったろう。現在我々が受ける苦しみは、日本軍の行為と比すればわずかなものである。彼ら二人のロシア兵は、幾本かの万年筆を胸につけ、手には数個の時計を。

戦利品のごとく笑いながら帰って行った。列車は行

き先不明のまま、また走り出した。小雪がちらちらしっていた。

クラスノヤルスク

十六日午後十時頃、横になっている私は列車の異変を感ずる。本線より支線に入っている様子だ。外は真っ暗である。雪が降っている。零下十度くらいだろう、寒い。屋根のない灯もないプラットホームに列車は停車した。駅名も分からなかった。下車命令が伝達されてくる。十二日間何も口にできなかったのと寒さのために体力は無い。立つことも苦しい戦友三村は、特に苦しもうだった。私は三村を助けながら貨車を降り、プラットに整列した。自動小銃を持ったロシア兵の人数も多かった。彼らに囲まれるように前進が始まる。死の行軍とはこのことなのか。足に力はなく、よろめき、倒れる。体は前に出るが足が出ない。ロシア兵はダワイダワイ、早く早くと大声で叫ぶ。雪が一〇センチほど積もっていた。月も星もない夜空である。暗い空に向かって私は心の中でお母さんと幾度も幾度も叫んだ。昨年病死したことは知っているのに、私の

頭には優しい母の顔が思い出される。三村は弱っていた。三村、母のところに元気で帰ろう、元気で帰ろう。彼は苦しい顔に笑顔を作った。岡山出身の戦友は三村一人だった。互いに助け合い、励まし合って来た仲である。私はあるだけの声を出して三村一人を励まし、歩き続けた。二人とも歩く足はちどり足である。一・五キロほどの道であったが遠く長い道だった。收容所の灯が見えた時、また生きることができた。また生きたと想う。この行軍で一・五キロ歩くのに幾人もの死亡者が出てしまった。栄養失調死である。

收容所

白い高い板塀、その上に教本の電流が流れている。要所には高台が作られ、自動小銃を持ったソ連兵が見張っていた。到着順に各兵舎に收容された。私たちは一一号舎に入る。小さな兵舎に二百人が詰め込まれ、床板に自由に休むことは出来ない。頭と足を交互にし横にならぬと休むことはできない。シベリアの冬は早くやって来る。零下十五―二〇度になっている。燃料は不足している。ペチカはあるが冷たい。一日一日と

寒さは増してくる。到着後二時間、少量であるが、水の多いアワのおかゆが支給された。塩味がつけてある。温かい一杯のおかゆであった。この味は一生忘れることができない。十三日目の早朝、口に食べた物だった。人間の命も強いものだ。この間に病弱な者は去っていった。この国では病弱な者は必要ないのだらう。持ち物は軍隊当時着用していた軍服、下着は上下一枚、毛布一枚、防寒外套であった。食事ももらう空き缶一個、木の枝のはしである。シラミは下着数百匹と付いている。シラミがいると、温かさを感じる。自分の友達のごとく、シラミの動作を見て楽しむ日もある。夜中に出てくる南京虫には困った。小豆ほどにも血を吸って歩けなくなっている。七月頃より風呂に入っていない。下着も長い間洗っていない。收容所内には洗面所はない。顔を洗うことはできなかった。暖かい地方だと水は自由に使用できたことだと思ふ。

九月二十二日、私たちは他の中隊と兵舎を混成し、中隊には畠山満、三村勉、二人の同年兵がいた。中隊は第四中隊である。九月下旬には零下三〇度以下

た。夜の明けるのは十時を過ぎる頃である。暗い収容所の間に五列になり点呼を受ける。人数を確認するのだが、ソ連軍下士官が幾度も幾度も計算する。寒い口の周りには白く凍っている。足は痛む。毎朝三十分くらい点呼に必要だった。暗い道を工場に歩を運ぶ。腰には空き缶を下げている。収容所は二十一地区第九収容所と言われていたが、他の収容所は皆目わからない。

工場よりは北に一・五キロほどのところにあり、エニセイ川の河畔を朝夕歩いてきた。樹木は収容所にはなかったが、幾本かの名の知らぬ三メートルほどの高さの木が見られた。草は一切見られず、私たちが到着した日に降った雪がそのままであり、以後雪の降ることとはなかった。収容所には約二千人、終戦時は各地の陣地より集結し、故郷も全国各地より集まり、中でも熊本、静岡の兵は多いようであった。戦友で岡山出身は三村勉君一人であった。他の収容所より一年後私たちのところに、岡山三野小学校一年上の広瀬君、二年上の三木さんに会うことができた。また日生の人も三木と言っていた。シベリアの広野において二人の学区

の人々に会うことができた。

死、四の中隊

私の配属された四中隊は、死の中隊と言われ、収容所内では一番苦しい作業であった。大型コンバインを作る工場であり、重労働は文筆で表すことのできないほど苦しい毎日であった。ノルマによって作業は進められ、十分な食事も支給されず、毎日のように兵隊は死亡していく。トロッコを押しながら失神する者、ロシアの指導者は作業を強要する。ノルマに達することができなければ食事が悪くなる。

十二月頃だと思う。床を共にしている納塚が、食事も済ませてから、子供の写真を出して一人で話している。「母さんを大切に、よく勉強して」彼は座って、じっと写真を見詰めていた。涙を流していた。彼の古里は大分県である。終戦十日ほど前に召集になって入隊したのだ。四十歳は近いように思われた。原隊は別であり、あまり知らなかった。眼鏡をした角顔の小男であった。入隊前は製鉄所の役員だったそうだ。長い間子供と話しているので、私は明朝仕事は早いん

だ、早く休むよう話した。彼は何も言わず横になった。これが私との最期であった。明朝彼は冷たくなっていた。栄養失調死は苦しむことなく自然に死んでいく。収容所で毎朝幾人も他界していった。私も戦友も、顔は目ばかり光り、別人のようになった。骨と骨がすれ、ガラガラ音がしているようだ。四中隊は特にひどい。作業が苦しく、太田伍長は便所で首をつつて他界した。車輪のない貨車の中で凍死した兵もいた。貨車に乗れば、日本に帰れると思うのだろう。五人ほど集団脱走した兵隊がいたが、数日後全員凍死したとの知らせがあった。東に向かって歩いたのだろう。日本に少しでも歩いて近づいても、寒いシベリアだ、帰れることはできない。承知しての逃走だったろう。死亡者は西の丘にすてた。初めは下着をつけていたが裸体で捨てるようになった。残った者が必要だった。私の順番も近いのではと思っていたが、彼らの住所等知ろうとも思わなかった。死亡者に対して淋しさも同情もなかった。若い者より年上の者が多く死んでいった。また、ねずみ、木の皮を多く食った者も死を早め

たようだ。十一月になれば、零下四〇度以下でくる。寒さと粗食、重労働、兵隊たちの苦しみは体力をも失わせ、人間の限界だ。気力で生き続けている。東の空を見ては泣いた日々でもある。私の二十歳も終わる頃のことである。一日の作業を終わり、また自動小銃を持ったロシア兵に囲まれて収容所に帰る。少しのかゆを食べ床につくのだが、休むことだけが楽しみだ。その楽しみも、寒さのため眠れない。けれども一日のうち最良の時間である。寒さのためか夜中に十数回小用に行く。便所までがまんできない。入口から用を足して歩く小便の道である。休みには氷を割って運んだ。眠っていても、口のまわりは白く凍っていた。室内も零下二〇度くらいだったろう。その朝はまた作業に出発して行く。一月一日元旦も腰に空き缶を下げて仕事に出発だ。

予言者

休日には兵隊たちは故郷の話に花を咲かせる。名所、名産、名物、同じことを話している。話すことによって満足している様子だ。最後には持って来て食べ

させろで話は終わる。收容所の中に予言者がいた。コンコンさんと言われ、各中隊に予言に行く。朝食のパンを少しずつ出し合ってお願ひする。コンコンさんはパンが好きだった。少ないときは不平を言う。コンコンさんは言う。この部隊の中に、いぬの年の者がいる。いぬの年の者は外に出ないとコンコンさんが安心して話せない。当たった、当たった、信ずる者ほど馬鹿はいない。二百人いるのだ、いて当たり前だ。いぬの年の者は迷惑だ、寒い戸外でふるえている。尋ねることは帰国（ダモイ）のことだ。いつ帰れるかを兵隊は知りたい。

一度、二度、三度、予言者の言葉は当たらない。彼はパンをいただき満足しているが、終わりには、信頼もなく、尋ねる人もなくなってしまう。

浪 曲

何も楽しむことのない日々には浪曲を語る兵がいた。またパンを出し合って中隊に来てもらった。浪曲師の周りに集まり聞き入っている。語る文句は虎造の語りである。内地を思い、故郷を思い、芝居小屋にいるか

のように楽しい一刻を過ごすのであった。收容所では人気があったが、同じ虎造の話も終わってしまった。笑いのない收容所に浪曲は私たちの心を慰めてくれた。彼は名前、故郷も話そうとしなかった。私たちが知ろうとしなかった。

望 郷

今日は零下四〇度以上も冷え込んだ。作業を終えて暗い夜道を收容所に向かっていく。戦友三村勉、畠山満、健在である。他中隊にいる仲田忠嗣、田中九市も元気でやっている。休みには互いに励まし合っている。兵舎に帰っても、半畳ほどの板の上で、自由に休むことはできないが、私の楽園の場所でもある。毎夜、毎夜、思うことは日本のことである。戦後の日本は何一つ我々にはわからない。終戦前後の様子も知らない。内地の人々も苦勞されていることだろう。帝国主義の日本は去り、軍国主義教育を受けた私たちは目的を失った人間であり、今は遠いシベリアの地で働いている。しかし今私には変わらぬ思い出がある。それは古里の風土、風景であった。いつも心の中に美しい

思い出がいっぱいである。人と人の情の美しさは忘れない。清い水の流れ、旭川、西川、北には三野公園半田山の連山も四季の景色、京山に沈む太陽の美しさ、東に備前富士、南には岡山城、肉親、友人、知人、一人一人を思い出して涙を流す。

一日に幾回となく古里を思い出す。帰りたい、帰りたい。このことは私のみならず兵全員の願いだった。

春が来る

四月に入ると温度も零下二〇度ほどになり、日々暖かくなってくる。私たち四中隊は、半数になったろうか、百人の者が死んでしまった。悪魔の冬であった。どの兵も故郷を思い、母を、妻を、子供たちの辛を願いながら他界してしまった。長いこと見ることでできなかった太陽を見る。樹木の枯れ木に青葉がポツンとくつついている。タンポポの黄色の花が咲いた。数本のタンポポ、他には草はなかった。体感温度零下六〇度、厳寒の中を耐え美しく見事に咲いている。兵隊たちも厳しい冬を過ごし、生きながらえてきた。人間も春が来れば心も温和になってくる。笑い声も聞こ

えるようになる。日本に帰るただ一つの港ナホトカも、春が来れば港の凍結も終わり、船が来るようになる。空は青空が広がり、気持ちのよい日々が続く。シベリアの冬を過ごした喜びは人間の喜びでもあった。自然の寒さを耐え春がやって来たのだ。

給食

朝食は一切れのパンである。一個のパンを十五切れにし、分配する。食パン一切れの半分くらいの大きさだった。このパンが命の綱でもあった。交代で当番の者が分配する。毎朝、空き缶に入れたくじを引いてパンの順番を決める。小さなパンは大きなパンを少し切つてのせる。公平にパンを支給するためだった。起床後、顔を洗うこともなく、ただ、パンの支給を待つ。あまりにも小さなパンだ。手の上にあるパンを大事に食するのだった。

昼食は工場で分配されるが、収容所で作られたコウリヤンのかゆの日が多かった。水が多く、手製のスプーンも必要がない程だった。時にはジャガイモの小さなのが三個のこともある。キャベツの外側の葉のみ

のこともある。一時間もたたぬ間に空腹を感じる。副食は一切なかった。たくあん一切れも口にすることはできなかった。

夕食は作業能力によって食事が支給された。働かざる者は食うべからず、この国の鉄則であった。甲・乙・丙・丁と受け取る窓口は別々になっている。甲食であっても、コウリヤンかアワのおかゆである。丁食になれば大変だ。水ばかりであった。土木作業の十一中隊は、寒さのため仕事は進まず、夕食の日が多かった、毎日、その日の作業ノルマによって、窓口が異なってくる。各窓口に入れ物を持って一列に整列して順番を待っている姿は捕虜の姿を一番よく表している。一個のにぎりがあれば、多くの者が死ぬことはなかったと思う。病弱の者は死ぬことだろう。

隊長当番

私は内藤中尉の当番兵として収容所内で中隊長の当番をしていた。隊長は何かと私によくしてくれた。これをねたんだ古年兵の兵長は、作業出発前に理由もなく私を強打した。柱に頭をぶつけて、失神してしまっ

た。同年兵の畠山君が、私を抱くようにして、元気をさせ、がまんするんだと元気づけてくれた。捕虜になっても旧軍隊のように制裁をする。遠い地において、理由のない制裁は悲しかった。作業に行くため整列してからも涙が流れていた。くやしかった。早く帰りたい、日本に帰りたい、心の中で叫びながら、歩き続けた。二十一歳の春の出来事だった。道端に一本の黄色の草花が咲いていた。タンポポだろう、雪が少し残っている。寒い冬を耐えてきた小さな花。その花を見たとき私の心は、今までの悲しみは吹き飛んでしまった。そうだ、私たちにも必ず春がやってくる。必ず笑う日もやってくる。人間だ、草花に負けないよう頑張ろう。必ず日本に帰るんだ。日本に帰るまでは頑張るんだと、歩きながら自分で自分に話すように作業場に向かう。

曹長

休日の午後の出来事であった。私たちの兵舎にいた兵士（二十一歳）が空腹のあまり何か食う物はないかと他中隊に入ったところを尋ねられ、純真な彼は自分

の行為を率直に上官に話した。そのために、曹長に制裁を受ける。彼は混成中隊のため私の知らぬ兵であったが、私の床の前での制裁であった。上半身を裸体にして、帯革（バンド）で打つのだ。白い裸に蛇のように青い筋が浮かぶ。彼はおとなしい好青年であった。打たれる度に悲鳴を上げている。私たちはこの仕打ちを止めることはできなかった。許しを願えば自分が打たれるからだ。彼は失神してしまった。私たち二、三人の者が水をかけ、元気を出すんだ。気のついた彼は、お母さん、お母さんと空を見詰めて叫んでいた。この声を聞いた曹長は、貴様にお母はいない、と叫びながらまた打ち始めた。無茶な仕打ちである。彼は倒れ動かなくなった。冷えきった彼の体をさすり温めた。彼は弱り切った声で、お母さん、お母さんと、母のところに行くかのごとく手を伸ばして他界してしまった。私は彼の住所も名前も知らない、知ろうともしなかった。今日まで生き永らえ、帰国の日を夢見ていたのに、両親が真実を知ったら悲しむことだろう。ソ連軍に報告した死因は病死であった。

シベリアの冬

一 暗い夜空に 星もなく 枯木に咲いた

雪の花 若い兵士が 泣いている

ああシベリアの 冬寒し

二 ねむる顔にも 雪の花 休む床板

身にしみる 今日夢みる 青畳み

ああシベリアの 夜は悲し

三 寒さとうえで 声もなく 昨夜の友は

今朝は亡く 私のいのち 今日ものび

ああシベリアの 夜は長し

四 東を見ては 母恋し 涙流して

母さんと 今日夢みる 帰る日を

ああシベリアの 冬寒し

(注) 淋しい、悲しい、シベリアの思い出は、私の青春でもあった。今も自分で作った詞を歌い、涙を流すことがある。私の人生を二度と子供たち、孫たち、永遠に味わうものではない。二度と戦争を行ってはならない。

クラスノヤルスクの町

シベリア大陸の中心地にあり、シベリア鉄道の中間駅でもある、三十万人くらいの都市であった。この町はツァー帝政時代より罪人流刑の地でもある。今も日本、ドイツ軍の捕虜、またソ連人民の罪人が多い罪人の町であった。町を歩く者はほとんどいない。商店街もない淋しいまちである。ドイツ軍の捕虜は気が荒れていた。ソ連兵の監視兵も多く度々自動小銃が発射されていた。ロシア人の囚人たちも私たちと同じ重労働を科せられている。冬は早くやってくる。九月中旬頃より四月上旬頃までは空気も凍り晴れることはない。太陽を見ることはできない。一年のうち零下三〇度以上冷え込む日が百五十日くらいある。人間の住む土地ではない。果物は一切できない、食ったことも見たこともない。罪人たちの衣食住は最低であったようだ。衣類の着替えを持っていない者はなかった。住む所も半畳ほどに一人雑居生活である。仕事はノルマを課せられ大変だ。体の弱い者は死んでしまう。死体は日本兵は西の丘に捨てたが、市民たちの死体も捨てたことと

思う。土が凍り穴を掘ることもできない。狼か野犬が食ったことだろう。寺院、墓地を見ることはできなかった。収容所の東にエニセイ河があり、川幅は十キロ近くあるだろう。対岸の民家がマツチ箱くらいに見える。人影は見えない。魚類はいないのだろう。釣っている人を見たことはない。南の方には罪人の働く工場が多くあるが、何を作っているのか分からない。自由な行動は出来ないので収容所と作業所以外は知らない。クラスノヤルスクは他の地区より罪人の送られる土地で、昔からの住人はいないと思う。人類の生活できる風土、土地ではない。共産党員、一部の幹部によって彼ら罪人を自由に操作して働かしているようだ。一部の幹部、指導者の生活は労働者の幾倍もの良い生活をしている。死の町と言ってよい、活気のない、人間の喜びを知らない者の集まりである淋しい町でもあった。

シベリアの冬

シベリアの冬は長かった。九月上旬には零下十幾度、中旬は零下十幾度、十月には三〇度を越してしま

う。三月中旬頃まで零下三〇度より暖かくならない。六月上旬頃まで夜は零下以下になる。五月に入ると日中は暖かく太陽も輝いてくる。十一月中旬から三月上旬までは零下四〇度を越すことが度々ある。屋外作業は四〇度を越すと作業は休む。空気が乾燥しているためか顔、手、足は寒さで痛むが、体は思ったほど寒さを感じない。雪は九月上旬一〇センチ降り、翌年暖かくなるまで積もっている。途中は雪は降らなかった。冬の夜明けは十時頃、三時頃には暗くなってくる。九月～四月上旬までは空気が凍り、暗く太陽を見ることができない。私が一番寒く感じたのは、体感温度マイナス六五度だった。

作業に出発して到着するまで、この世とは思えぬ。寒さより刺すような痛みを感じ、顔は真っ白く凍ってしまう。零下四〇度になれば、枯木が白く凍ってしまう。電線は数倍にも太く凍っている。電線はダンスをしている。電力は不足なのか、暗い電灯が所々にともっている。霧の中にぼんやりと見える。

十時頃、貨車の石炭下ろしに出たことがあった。作

業から帰り一足しかない靴下を水洗いしベチカで乾かしていた時であり、少し湿った靴下を仕方なく使用した。大きな貨車を数人でスコップを使用し下ろす作業が終わり帰る頃、足に痛みを感じ、痛む足を引きずって収容所に帰った。靴と靴下に肉がくっついて取れない。靴を切り、自然に暖かくなり靴下のとれるのを待つ。指の色は変わり、痛みはひどい。指は凍傷になってしまった。数本の指が変形してしまった。凍傷で作業を休むことは許されず、一カ月近く痛む足を引きずって工場に歩いて行った。

最初の冬が一番死亡者が多かった。食料の不足、燃料の不足、作業の重労働のためだ。二年目、三年目の冬は燃料を入手することができ、収容所内は暖かくすることができた。作業から帰るとき、石炭をポケットに入れて帰ることができたからだ。冬の間は草もなく、食する物は給食以外に得られず、幾ら寒くても熱が三八度以上出なければ休むことはできず、年上の兵隊ほど死亡率が高かった。冬季はエニセイ河の水の流れも止まり、一面氷の川と化してしまう。トラックが

走っている。夜の長いシベリアの冬は故郷の思いを、古里の思い出を毎度のごとく空想していた。早く帰りたい。畳の上に横になってみたい。板の上では体も痛む、寒さも増してくる。早く日本に帰りたい。日本には多くの草がある。草を食っても空腹を満たしたい。二年目、三年目の秋は、またこの冬を過ごせるだろうかと不安をも感ずる。

戦友 三村勉

三村は岡山県人唯一の人でもあり、初年兵教育から戦闘も共に助け合い、励まし合ってきた。捕虜になつてから少し体力を無くしてきた。別に体が痛むようでもない。医者に診てもらうことができない。風邪をひいても腹痛でもビタミン剤が支給され他の薬はなかった。二十一年春、シベリアも春がやってきた。暖かくなってきた。四中隊、殺人工場から作業を終わり収容所に帰る途中、三村は隊列を遅れだした。私は彼の遅れに気づき、三村に手を貸す。ソ連兵は別に何も言わなかった。二人抱き合うようにして歩く。片山、国に帰ったらお母によく伝えてくれ。おれはもうだめ

だ。三村は元気がない声で話す。軍服も帽子も戦争中着用していたものだ。頑張るんだ、二人で元気で帰ろう。暖かくなってきたんだ、帰れる日も近いんだ。元気づけても、おれはだめだ、お母によろしくの返事ばかりだ。戦時中、三村は私に話した。片山、戦死したら骨は持つて帰ると。私も頼むと言った。しかし三村は自分で死ぬとも言わず、骨を頼むも言わなかった。彼が今は弱気になってしまった。温和な好青年であった。彼は日大出身である。実家は新見で菓子問屋の息子であった。いつも父母、兄、兄嫁、兄の子らの写真を見せてくれた。特に兄嫁には大変お世話になったとも言っていた。帰るとその足で所内の医務科に入院した。ベッドに横になった三村は、もう話すこともできないほど弱っていた。深夜までベッドの近くにいたが、明朝は仕事なので帰るが、朝早く来るから元気を出すんだぞ。今まで無口で目を閉じていた彼が、うなずいて私の手を握り、お母に……頼む。何を言っているんだ、頑張るんだ、二人で帰ろう。朝早く来るからと病室を出た。美しい夜空だった。今まで見たことの

ない夜空だった。三村が元気になることを願った。多くの兵が死んでいった。私の生も保証できない今日の日なんだ。兵士は虫が死んでいくようなものだ、悲しみは少しもなかった。三村の病気は別だった。弱音を聞くのがつらかった、淋しかった。兵舎に帰って床についてからも彼の面影を思い、よく眠れなかった。朝早く彼を訪ねたが、三村はいなかった。病室の他の兵士に三村のことを尋ねたところ、ロシア兵が他に連れて行ったとのこと、その時には生きていた。今までも死に至る前に連れ去ることがあったが、行き先は一切不明だった。三村も以後行き先不明、生死も不明である、確認できない。しかし彼との別れの時の様子では元気でいるとは思えない。戦友を失った私は、彼はどこかの病院で体も良くなり、元気に日本に帰れることを願った。届かぬ願いも承知の上、彼の死を信ずることとはできなかった。

戦友 三村勉君を思って

一 友よ祖国に 帰る日を 故郷の母に

会える日を 東の空を 見ては泣く

ああシベリアの 冬寒し

二 寒い冬をも 耐えたのに 私を残し

去って行く 君の面影 いつまで

ああシベリアの 冬寒し

三 君は帰らぬ 人となり 君の想いは

今日の日も 私と共に 生きている

ああシベリアの 冬寒し

戦後五十八年、今も私は三村君と共に過ごしている。生死を共にした戦友は一生活れることはできない。上記のつまらない詞ではあるが、自動車を運転しながら大声を出して歌う。涙を流して歌う。彼と苦しみ、彼と共に生きた戦場、度々死を越えて来たのに、帰らぬ人になってしまった。三村君と別れて二年六ヵ月後私が復員、岡山に帰ってから、万一三村が元気で帰っているのではないかと思ひ、父母の所に手紙を書いた。新見市新町であった。数日後父が私を訪ねて来られ、彼が帰国してなく家族の者は彼の生死は何も知

らされていなかった。勉君との別れを明確に父親に知らせると共に、彼の死を確認してないことも話した。また私以外に、三村勉君との別れを知る人はないことも知らせた。以後一年、父親の願いにより三村勉君との別れの日を彼の命日とし、死亡届を役所に提出した。

後日新見より、三村君の告別式の通知を受け、新見まで彼の告別式に参列した。私は彼の死を見ることができず、死亡届を出し公報を出した。もしも勉君が帰ったら、元気で帰ったら喜んで彼を迎えるようお願いした。大変な告別式である。戦友の一人として参列した。墓地は駅の東にある丘であった。長い参列者が続いている。彼の冥福と家族の幸を心からお祈りする。戦後五十八年になってしまった。三村は帰らなかつた。別れた日の三村の影が今も昨日のように思い出される。

過酷な抑留生活

広島県 平野 正

一、北米合衆国加州ロングビーチ市において大正十(一九二二)年五月十五日出生。

広島県立工業学校卒業、南満州鉄道綽就職、高専修了。

家族は母と兄、弟は大学生及び旧中学生の五人構成。

二、昭和十七(一九四二)年一月、満州関東軍に入隊。虎頭国境守備隊第二地区隊勤務。

昭和二十年二月、日本国土防衛軍舞鶴一〇六二部隊に編成隊として牡丹江鏡泊湖において陣地構築中。

三、八月二十七日、ソ連軍侵攻。二十九日、武装解除。

四、終戦の詔勅はなし。休戦という状況で、関東軍社